

# サッカー選手の状態不安の比較分析

## A comparative analysis of soccer players' State anxiety

1K09A217-3

指導教員 主査 正木宏明 先生

三瀬 隼人

副査 堀野博幸 先生

### 【目的】

競技スポーツにおいて優れた競技パフォーマンスを発揮するためには、競技前や競技場面での状態不安を作り出す感情に左右されないでどのようにして心の状態不安をコントロールしていくかが大切であることが明らかになってきた。本研究ではサッカー選手のレギュラーと非レギュラーの選手で状態不安の差があるのかを調査する。

### 【方法】

W大学のサッカーサークルに所属する男子サッカー部員35名を対象として調査をした。平均年齢は20.2歳±1.4歳（Aチーム16名、平均年齢は20.6歳±1.4歳、Bチーム19名、平均年齢は19.9歳±1.4歳）であった。調査方法は、日本語版状態不安尺度 STAI Form X-1 を用いて調査した。調査は試合前日、1試合目の試合1時間前・1時間後、2試合目の試合1時間前・1時間後の計5回、回答してもらった。分析はAチームとBチーム、ディフェンシブ・ポジションのAチームとBチームの選手、オフエンシブ・ポジションのAチームとBチームの選手間での状態不安得点の平均値を比較をした。

### 【結果】

AチームとBチーム間の選手の状態不安得点の平均値を比較すると、1試合目の試合終了1時間後について有意傾向が認められた( $F(1, 33) = 0.03, p < .10$ )。また2試合目の試合開始1時間前について2群間の比較をした結果、群の有意差が認められた。 $(F(1, 33) = 1.18, p = .03)$ 。

ディフェンシブ・ポジション間のAチームとBチームの選手の状態不安得点の平均値を比較すると、1試合目の試合開始1時間前について2群間の比較をした結果、有意傾向が認められた。 $(F(1, 19) = 0.84, p < .10)$ 。2試合目の試合開始1時間前について2群間の比較をした結果、有意傾向が認められた。 $(F(1, 19) = 0.67, p < .10)$ 。

オフエンシブ・ポジション間のAチームとBチームの選手の状態不安得点の平均値を比較すると、2試合目の試合終了1時間後について2群間の比較をした結果、有意差が認められた。 $(F(1, 12) = 0.025, p = .05)$ 。

### 【考察】

AチームとBチーム間の1試合目の試合終了1時間後について有意傾向が認められたが、以下のように考察することができる。Aチームは逆転勝ちという勝利をつかむことができたのに対

して、Bチームは逆転負けをしてしまったので状態不安の平均値が高い傾向になり有意傾向が認められたのだと考えることができる。2試合目の試合開始1時間前に有意差が認められたが、以下のように考察することができる。Aチームは前日に逆転勝ちしたので良いイメージを抱いたまま試合に臨めるのに対してBチームは前日に逆転負けをしたので悪いイメージのままなので状態不安得点の平均値が高い傾向になり有意差が認められたのだと考えることができる。

ディフェンシブ・ポジション間のAチームとBチームの1試合目の試合開始1時間前に有意傾向が認められたが以下のことから考察することができる。Aチームのディフェンシブ・ポジションの選手は試合に慣れている選手が多いのに対してBチームは試合に慣れている選手が少なく試合前から不安になっている選手が多かったために状態不安得点の平均値が高い傾向になり有意傾向が認められたのではないかと考えることができる。2試合目の試合開始1時間前に有意傾向が認められたが、以下のことから考察することができる。Aチームは失点したものの逆転勝ちしたが、Bチームは自分たちのミスから失点しまい逆転負けをしてしまったことで状態不安得点の平均値が高い傾向になり有意傾向が認められたと考える。

オフエンシブ・ポジション間のAチームとBチームの2試合目の試合終了1時間後に有意差が認められたが、以下のように考察することができる。Aチームは多くの得点チャンスをつくることのできたのに得点を奪えずに負けてしまった。Bチームは試合に敗れたものの格上の相手から得点を奪うことができ、得点チャンスもつくることのできたのでAチームの方が状態不安得点の平均値が高い傾向になり有意差が認められたのだと考えることができる。

AチームとBチームの選手、ディフェンシブ・ポジション間のAチームとBチームの選手、オフエンシブ・ポジションのAチームとBチームの選手の試合前日、1試合目・2試合目の試合開始1時間前、試合終了1時間後の状態不安得点の平均値を比較してみて、Bチームの方が状態不安得点の平均値が高い傾向にあることが明らかになった。

このことからAチームの選手よりBチームの選手の状態不安は比較的に高い傾向にあることが分かった。